

[演題 5]

知的障がい者対象のオープンカレッジ

増田 貴文¹⁾, 小林 朝子¹⁾, 追田 拓哉¹⁾, 渡辺 康大¹⁾, 相澤 譲治²⁾

1) 神戸学院大学総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科4年次生

2) 神戸学院大学総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科

1. 実践研究の背景

特別支援学校高等部を卒業した知的障がい者に対する生涯学習の機会がほとんどないことをふまえ、本学において知的障がい者対象のオープンカレッジ（生涯学習講座）を実施した。オープンカレッジはわが国において、1998年に大阪府立大学社会福祉学部ではじめて開催され、その後桃山学院大学、徳島大学、東京学芸大学、東北大学等の大学において実施されており、全国的な広がりをみせている。

本実践における意義は、次の3点である。①知的障がい者の教育権保障②知的障がい者の発達の可能性③地域社会に対する大学の責務。この目標自体、今回のオープンカレッジの実施にあたり全面的に達成されたとは言いがたいが、一つの契機となったと考える。

以下、本学ではじめて実施した知的障がい者を対象としたオープンカレッジの実践を紹介する。

2. オープンカレッジ実施に向けて

(1) 桃山学院大学への情報収集

オープンカレッジを先行実施している桃山学院大学社会福祉学科の安原教授のもとへ情報収集のために訪問した。安原教授は、大阪府立大学でオープンカレッジが開催された際、大学院生であり事務局次長をされていた方である。また、同時に学習サポーター（学生ボランティア）

のリーダーも紹介していただき、実施にあたり随時情報交換を行った。

情報収集のポイントは、次の通りである。①参加者（知的障がいをもつご本人、オープンカレッジでは「受講生」と呼称する）を募集する際の留意点②授業（講座）の組み立て方とプログラム構成（時間配分や授業内容）③オープンカレッジ実施のための実行委員会の役割（とくに学習サポーターの役割）

(2) 学習サポーターの募集と勉強会

当日の受講生をサポートする学生は、学習サポーターと呼ばれる。基本、一人の受講生に一人の学習サポーターが担当した。そこで、学科学生に対し学習サポーターの募集をおこない、最終的には1年生を含む24名の学習サポーターが集まった。

なお、この学習サポーターの募集や勉強会実施は、相澤ゼミ生を中心とした実行委員会メンバーがおこなっている。学習サポーターに対しては、2回勉強会をおこなっている。その内容は、1回目は、①オープンカレッジの目的、内容の紹介②学習サポーターの役割の説明③当日の学習サポーターの留意点と具体的動態の案内である。とくに、オープンカレッジでは受講生が主人公であり、学習サポーターは側面的支援者の役割であることの確認がなされた。2回目は、知的障がいの方と接したことのない学習サポーターがいるので、ソーシャルワーク実習で障がい者福祉分野で実践した4年次生から、具体的な

支援の留意点の説明がなされた。

また、受講生の個人情報の取り扱いについて徹底管理する旨の確認をおこなった。

3. オープンカレッジの講座

2016年6月18日(土)、7月2日(土)、7月16日(土)の3日間にわたり、計5回の講座を実施した。受講生は計14名である。

講座名と担当者は、次の通りである。①「自分の良いところを知ろう」 九十九綾子氏(本学科教員)②「お金の使い方を知ろう」 島谷信幸氏(元児童養護施設職員)③「世界の人たちを知ろう」 佐野光彦氏(本学科教員)④「恋愛のルールについて考えよう」 石田賀奈子氏(本学科教員)⑤「車いすを体験しよう」 糟谷佐紀氏(本学科教員)⑤では、保護者の方も参加され、実際に車いす体験をおこなった。車いすを操作し、介助者体験は貴重な機会となった。

なお、初日では入学式、最終日には修了式をおこない、大学という雰囲気を体験していただいた。修了式では、一人ひとりに修了証書を授与した。また、お昼は学内の学食を利用してもらい、「自分でお金をもって」、「自分でメニューをみて選び」(学習サポーターの支援を受けながら)、学食での雰囲気を感じてもらった。急なことであったが、大学の図書館も見学したいとの要望が生じたので、図書館側と交渉し、2日目の昼食後に「図書館ツアー」を実施した。

4. 結果と考察

毎回の講座開催後に、受講生、学生サポーター、講師に対してアンケートを実施し、随時ふりかえりと次回への改善点を実行委員会で確認しあった。

受講生からは、総じて「とてもたのしかった」、「大学で授業が受けれてとても良かった」「次回

(来年)もぜひ受講したい」との声であった。また、学習サポーターからは、「受講生となかなかコミュニケーションがとりにくかった」、「昼食後のフリータイムに学習サポーター自身、トイレに行きたかったがそばに他の学習サポーターがいなかったのですぐに行けない場面があった」等の困ったことの声があがっていた。

課題としては、3点指摘できる。①講座内容自体、これまでのオープンカレッジの講座内容を検討しながら、実行委員会で決定していったが、事前に受講予定者にニーズを聞くこともできたのではないかと考える。②情報共有の大切さである。オープンカレッジ当日では、思いもかけないことも生じたので、クライシス状況への対処の徹底が不可欠であったと考える。リスクマネジメントを含め、受講生への見守りは複数の学習サポーターの存在が必要と考える。③学習サポーターと受講生との組み合わせの配慮の不十分さがあげられる。1年次生にコミュニケーションをとることが難しい受講生を担当してもらったことから、少し不安となった学習サポーターがいた。受講生の事前の情報把握をしっかりとしながらの学習サポーターの配慮の必要性を考えさせられた。